令和６年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立大宮西中学校 ）　　学校番号　２３４　　【様式】

目指す学校像	生徒・教職員一人ひとりの志（希望）を支え、誰もが成長を実感できる笑顔（あい）あふれる学校

重点目標	
	１「学びの自律」「学びの個別最適化」と「学びの探求化」の実現 ２　安全・安心な教育環境の整備・充実 ３　学校に携わるすべての人々の Well-being(幸せ)の実現に向けた、開かれた教育課程の推進 ４「生徒の探求的な学びに伴走できる教師」の具現化

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和７年２月７日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1 学力向上	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査において、数学、英語においては、やや全国の平均を上回っているが、市の学習状況調査では、各学年市の平均を下回っている ○基礎学力の定着状況に大きな個人差（フタコブ分布）がある。 〈課題〉 ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、基礎的・基本的な知識・技能が定着していない部分があり、改善と努力を要する。 ○「家で、自分で計画を立てて勉強している」の項目の数値が低く、学習計画の立て方や励ましの継続的な取組が必要である。 ○教科の特質に応じてＩＣＴを活用した学習活動を設定し、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善が必要である。	・「学びの自律」「学びの個別最適化」「学びの探求化」に向けた実践	①学校の課題に基づき、学力向上ポートフォリオの手立てについて自己評価シートに各教員が位置付ける。 ②校務分掌の「学習部」を中心にドリルパークやスタディサプリの活用について具体策を検討し、家庭学習習慣の定着・充実に取り組む。また、小学校とも課題を共有し連携する。 ③学びの自律化を目指すＩＣＴを基盤とした「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業を実践する。	①人事評価面談において、すべての教員が位置づけ、評価面談等が実施できたか。 ②学校自己評価アンケート項目「⑤家庭学習の習慣がなされている」において、肯定的回答が 54%以上となったか。 ③「学びの指標」のアンケート項目で 3.3 以上となったか。	①ポートフォリオの手立てについて、すべての教員が位置付けた。また、評価面談についても実施できた。 ②大宮西小学校と連携し、家庭学習週間の設定、国語、社会の確認テストに共に取り組んだ。59%（生徒）で、昨年より 5pt 上回った。 ③指導課訪問等を通して授業実践に取り組んだ。「学びの指標」は 3.1pt で、昨年度より－0.2pt であった。	A	●「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指した指導法の改善 ○生徒等の学習の改善を図る、教育データ（SSSP）の適切な活用 ○ICT の活用の意義を理解した上での効果的な紙と ICT の併用の方法 ○生徒の学びに伴走し、生徒の興味・関心を引き出す学びの動機付けや資質・能力の育成に向けた授業改善 ○生徒が主体的に取組む家庭学習の充実とモジュールの設定	・いわゆる中間層を育てる、基礎学力を定着させるための取組みを考える必要がある。 ・家庭学習については、各家庭によって差が大きいのではないか。学校からではなく、ＰＴＡからの発信とする等の工夫も考えられる。 ・藤花教室での学習の様子から、子どもたちの「自分で考える力」が低下しているように感じられる。 ・小学校高学年から家庭学習を意識づけて、中学校につないでいきたい。
		・心の教育・豊かな人間性の育成	①自己の生き方について深める道徳科の授業改善や、特別活動総合的な学習の時間（潤いの時間 STEAMS TIME 等）を通して、豊かな人間性や創造性を育む授業実践に取り組む。 ②生徒主体の生徒会活動を活性化させ、校則の見直しやＳＤＧｓの実現を目指した取組、ボランティア活動を実践する。	①学校自己評価に係る項目「⑮学校は私たちの生き方について、考えさせたり豊かな心を育てようとしたりしている」について、肯定的な回答の割合が、90%以上となったか。 ②全国学力・学習状況調査において、「地域や社会をよくするために何かしてみたいですか」の項目で肯定的回答が 53.2%以上となったか。	①総合的な学習の時間等で、教科横断的な視点を通して授業実践に取り組んだ。生徒、保護者の平均 94%で、昨年度より 4pt 上回った。 ②79.4%で、昨年度より 7.9pt 上回った。また全国平均を、3.3pt 上回った。 （家庭科部の SDGｓアワード予選通過、創立 50 周年記念事業ボランティア活動）	A	●リアルな体験や実生活と結びついた授業の充実（教科横断的な視点） ○進路・キャリア教育、プログラミング教育等の窓口から Well-being が高まる教育課程を推進する。 ○生徒が主体的に取組むリアルな体験を重視し、自分事として地域貢献の視点で自走するＳＤＧｓやボランティア活動を進める。	
2 安心・安全	〈現状〉 ○学校評価において、「楽しく学校生活を送っている」は 95%を維持することができた。 ○特別に配慮を要する生徒の数は、年々増加傾向にある。 〈課題〉 ○中一ギャップ、生活の変化が生徒の心身に与える影響が大きいことから、今後も、生徒一人ひとりの状況を的確に把握し、組織で支援・相談していく体制、仕組みづくりが課題である。 ○信頼度における肯定的な回答は５３%であり、自己肯定感の向上を図る必要がある。	・個に応じた生徒指導・教育相談における支援体制の充実	①個別対応が必要な生徒の職員配置を柔軟に行い。個別の指導計画に反映させる。 ②生徒指導・教育相談・特別支援委員会等で、生徒個々の状況を、ICT（SSSP 等）を活用した蓄積データ等でも把握し、組織的に細やかな支援、相談を行う。 ③Solaる一むの運用方法について検討をするとともに、体制を整える。	①学校自己評価に係る生徒・保護者アンケート、「⑰学校は、私たちや保護者の相談事や悩みなどについて、親身に応じてくれる」等関連する項目の肯定的な回答の割合が 88%以上となったか。 ②学校自己評価に係る教員アンケートにおいて、関連する項目「⑰相談事や悩み事について親身に応じている」の肯定的な回答の割合が97%以上となったか。	①「その日のことはその日のうちに」をモットーに、組織的に生徒指導、教育相談において個別に、組織的に対応した。 89%で、昨年度より 1pt 上回った。 ②運営員会、生徒指導委員会、教育相談部会の連携体制を構築し、教育委員会や他機関と連携を積極的に図った。 100%で、昨年度より 3pt 上回った。	A	●生徒一人ひとりへの細やかな指導と支援体制の充実 ○教職員共通理解のもと、教育相談部会等において、外部機関と連携を図りながら個に応じた支援の充実（SSSP）と、通常学級と特別支援学級における弾力的運用について一層強化する。 ○生徒との信頼関係を構築すると共に、それぞれの可能性や活躍の場を引き出す集団づくり（学年・学級経営）を行う。	・大宮西中は、近隣に警察署、公民館、特別支援学校等の公共施設があり、見守る目が多いことはプラスの要因として働いている。 ・小・中学校がしっかりと連携を図って、９年間を見通した取組みとなっていることは評価できる。 ・学校内部の課題だけではなく、外的要因にどのように対応するのかということは難しい課題である。 ・薬物乱用防止について、西警察も協力できる。高校年代に向けて予防的に教育していくことが大切。
		・連続性を生かした小・中一貫教育の推進	①大宮西小との相互授業参観や合同研修を実施し児童生徒の教育的課題を把握・共有する。 ②校内における学校行事の充実・改善と、つぼみの日、あいさつ運動、いじめ撲滅子ども会議、ひまわり特別支援学校と交流の実践等で児童生徒間の交流事業を実施する。	①心と生活のアンケートの信頼度を昨年の値、52%以上となったか。 ②学校自己評価に係る生徒アンケートに「⑬学校行事は楽しく充実している」と肯定的な回答する生徒の割合が96%以上となったか。	①大宮西小との相互授業参観や夏季の合同研修、授業参観等を実施し、教育的課題を共有した。 56%で、昨年度よりも 4pt 上回った。 ②2 年の総合的な学習の時間において、ひまわり特別支援学校とボッチャを通して交流した。98%で、昨年度より 2pt 上回った。	A	●小・中・特別支援学校との連携 ○学習・生活面の課題や結果、支援の工夫を共有し、９年間の学びの連続性を強化していく。 ○生徒会やクラス、全校等グループのよさを生かしながら主体性をもって行動できる意思決定の場を増やす。	
3 地域と共にある学校づくり	〈現状〉 ○藤花教室の学習支援ボランティア、自治会・育成会・PTA を中心とした SSN からの支援を得て、地域と学校との協働活動が実施されている。 ○土曜チャレンジスクール（藤花教室）の参加者が減少している。 〈課題〉 ○学校運営協議会で協議した内容について、その実現に向けた具体的な方策と実行について役割を確認し、家庭・地域と共に、継続的に取組を推進していくことが課題である。 ○創立 50 周年について、学校・家庭・地域が連携し、協働していくことが求められる。	・学校運営協議会・ＳＳＮ連携の強化と地域連携事業の実施と推進	①地域の教育リソース（土曜チャレ：藤花教室）を活用した教育活動を年間計画に位置付けて年 20 回実施と参加者を増やす。 ②公民館との連携事業、地域行事等への積極的な参加と、朝のあいさつ運動やボランティア活動等を生徒、ＰＴＡ・地域とともに、連携して実施する。 ③創立 50 周年事業において生徒主体の内容にも取り組む。	①土曜チャレンジスクール（藤花教室）が、年間２０回実施できたか。 ②藤花教室の参加者が、昨年度平均 11.45 人以上となったか。 ③学校自己評価に係るアンケートで、「⑪地域の行事に積極的に参加している」で肯定的回答が35%以上となったか。 ④学校自己評価に係るアンケートにおいて、「㉑保護者の行事参加」で、肯定的回答の割合が 83%を上回ったか。	①年間 20 回実施できた。 ②15.0 人で、昨年度平均を 3.55pt 上回った。 ③学校運営協議会を核とし、PTA や自治会、青少年育成会等の協力のもと、生徒が主語となる周年行事を実施し、生徒の活躍場面が増えた。（ふじだなプロジェクト、施設整備等） 37%で、昨年より 2pt 上回った。 ④82%で、昨年より 1pt 下回った。	A	●地域・社会や産業界と連携しながら、学校の教育活動全体を通じて、生徒が自分らしい生き方を実現するための力の育成 ○チャレンジスクールの趣旨やよさを広げていくとともに、定期テスト実施日の調整等生徒がさらに参加しやすい環境を作っていく。 ○学校・地域・家庭が共有する「地域行事カレンダー」を調整、作成し、積極的な参加を促す。	・学校評価の数字が 37%ではあるが、自治会員の表示への参加率と比較しても少ないわけではない。学校から地域の行事への参加について働きかけがあることはありがたい。 ・防災訓練に生徒が参加してくれるとありがたい。中学生は実際の災害時には運営側として動けることを期待している。 ・小学生も習い事等で忙しくしている様子がある。休日に地域の行事に参加するには、保護者等の周囲の大人がまず参加する姿を見せることが必要。
		・開かれた学校づくりを目指した情報発信	①教育課程説明会・保護者会・その他行事等において、目指す生徒の姿等を広く、家庭、地域と共有できるようにする。 ②学校・学年だより、学校ＨＰ、学校安心メール等で情報を発信するとともにＩＣＴ等を活用しながら学校公開、授業参観、保護者会等を実施する。	①学校自己評価に係る生徒・保護者アンケート、「①目標をもって学校生活を送っている」の肯定的な回答の割合が 80%以上となったか。 ②学校評価に係るアンケートで、「⑳保護者は学校とのコミュニケーションがうまくとれている」の肯定的な回答の割合が 80%以上となったか。	①84%で、目標値よりも、4pt 上回った。 ②5 月の教育課程説明会や新入生保護者説明会において、学校経営方針等について説明し、授業参観、保護者会等も実施した。 82%で、目標値よりも、2pt 上回った。	A	●学校・家庭・地域との課題の共有 ○学校 HP や Forms を活用し、学校運営協議会や生徒の様子が伝わる広報活動にする。 ○地域部活動移行へ向けた、人材発掘に取り組む。 ○地域・家庭とさらに協同し、「自走」する生徒の育成に取り組む。	
4 教職員の資質向上	〈現状〉 ○ICT の活用については、提出物の集約や定期テスト、アンケート機能の活用等、進んでいる。 ○教員個々の研修については、面談等で行い、目標をもって取り組んでいる。 〈課題〉 ○タブレットの活用、授業改善については個人差が見られ、成果や課題の共有が必要である。 ○組織としての質を高めるために、職員の状況把握と、支援内容の共通理解する必要がある。	・生徒の探求的な学びに伴走できる教師の具現化	①全国教員研修プラットフォーム Plant の周知と積極的な参加に取り組む。 ②当初面談時に研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励に関する指導・助言と振り返りを行う。 ③ICT 等の活用により、業務の効率化を図る。 ④朝の打ち合わせ日程削減・中間テストの見直し・アンケート機能の活用等のさらなる活用に取り組む。	①学力向上カウンセリングの研修後の、学びの指標、授業アンケート項目において、3.5 以上となったか。 ②学校評価「⑫学校はわかりやすい授業の実践に努めている」では、昨年度同 100%の教員が、授業改善に取り組むことができたか。 ③昨年度の平均在校時間 37.12 時間を下回ったか。	①指導主事を招聘し、研修を実施した。学びの指標で基礎項目が 3.4 で目標値より—0.1pt で、市平均と同等であった。 ②計画訪問において、全ての教員が学校研修課題に基づいた授業実践に取り組んだ。また、研修も実施した。 100%の教員が、授業改善に取り組むことができた。 ③平均在校時間は、40.56 時間で、昨年度より度 3.44 時間増であった。	B	●組織（教科会等）の連携と教師一人一人の専門性の向上 ○研修部における、授業改善に関わる年間研修計画の立案と授業実践 ○研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励の取組 ○採点機能のソフト等のさらなる活用と、教育課程の見直し	・部活動がある中で時間外在校時間が約４０時間で収まっているのは成果と捉えてよいのではないか。 ・効率化を進める中で、予算の制約でツール導入が滞ってしまう状況は望ましくない。